新興都市に急発展

――多摩の町勢展望――

教育など人口増に対処

時代の脚光をあびて年々急速なる発展をとげつつある多摩町の入口はすでに二万五千万をこえ都下町村中での屈指の増加率を示しているが多摩ニュータウンの建設という地域大開発に伴い今後の理想的な町づくりを進めている町勢を展望してみる。

人口の増加は必然的に学童の増加であり、教育面の対策としては多摩中学校の増築工事（近く完成）第二小学校の増築と、それぞれ施設の拡充をはかっている。

交通面では各地区の町道の改修、舗装などであるが川崎街道など中心の大通りはこれからである。

水道も人口増加に備えての第二次拡張工事で、ニュータウン区域外四万五千人分の給水施設のうち、予定された部分も順調に進んでいる。

多摩ニュータウンの建設も一部分の用地買収も終り、宅地造成工事が各所で行なわれており、本年はいよいよ建物の建築が始まり、来春には一部入居の予定となり、従って上下水道の工事も着々進められている。

これに伴いニュータウン区域外の関連公共事業として街道事業では、鎌倉街道（一、三、二号線）川崎街道（一、三、二号線）の用地買収も進み、道路拡張工事も始まる予定である。関戸橋の拡張とその北側の府中市内の街路新設も進められ、甲州街道へ直通も近いことであろう。

河川改修も大栗川下流はすでに終り、その上流、乞田川の開始も本年内に完成され、洪水に対する対策も実施される段階である。

さて、町役場庁舎も老朽であったが、町勢の発展とともに職員の増加により狭隘となり、隣接地に新築移転した。

今年九月完成目標に昨秋新築工事に着手。約一億二千万円の予算でつくられた新庁舎は、将来は学校に使えるという新しい方式である。延べ面積約二千七百平方メートルの四階建て、各階には壁まわりのほか一本も柱がない。アルミニュームの支柱を動かすだけで、部屋の仕切りは自由自在でどのようにも模様換えできる。

同町が、この方式を取り入れたのは、多摩ニュータウンの行政区分の成りゆき次第では同役場はなくなりニュータウンの中心は現在地より約二キロ西方に移る。そこでこの新庁舎はいつでも学校として使用可能の構想である。

新庁舎移転にともない、行政組織も機構改革して近代化をはかった。

現在、多摩町の人口は約二万五千人、世帯数約八千戸ではあるが、多摩ニュータウンの建設にともない四年後の昭和四十八年には人口十万人を越え、十年後の昭和五十四年には人口二十万人に達し、新興都市へと急発展する。

従って、人口増加にともなう行政需要に対処するための内部管理部門の強化をはかったものといえる。

怪獣（マンモス）

怪獣マンモスは何故死んだ。それは餌を漁るのに牙が便利だから牙ばかり成長してあまりに太り過ぎた自分の牙をもてあました。そしてついに地上から姿を消すにいたったと語り伝えられている。

いまや我が国の都会がマンモスのそれによく似てあまり大きく太り過ぎ身動きすらならぬ破目におち入っているのである。

このことは東京地区の過密状態が雄弁に物語っている。これがため住宅難、交通難、公害といつた災害は際限がなく、そればかりか地域社会全体に大きく影響しつつあり、住民の生活環境に対しても好ましくないくらい将来を招致せんとしている。

ではその要因はどこにあったかそれは戦後の高度経済成長の熱に浮かされあらゆる企業が大都会に集中したためである中小企業の相次ぐ倒産といい、地方都市が折角誘致した諸企業が現在では却って足手まといとなり一地方都市の財政では賄いきれない状態である。とんな状態では正常な産業の発展があり得る道理がない、世人、ややもすればこの不況を世界情勢が然らしむるものと気休めに言うが、甚だしい誤りでこの原因こそは国土開発の総合性を欠いた無計画が然らしめたものである。もともと世界の七不思議とまでいわれる我が国の生産発展の裏には地方という大きな後盾があったればこそである。

その大切な支援部隊の地方に関古鳥を鳴かし今頃労力不足などと騒ぐのは笑止の至りである

多摩丘陵を土台として合理的国土開発が提唱せられてここに十余年、今や多摩ニュータウンは時代の脚光を浴びて輝かしくスタート、名神・東名の高速道路の完結、中央高速道路はすでに富士山麓まで完成次ぎの延長工事も続行されている。また、京王線、小田急線の延長、国鉄による環状線の新設と相待って多摩地方政治経済文化の中心たらんとしている。

社会現象は日々時々と生長するものであり、ときに予期せざる、青写真になかった事態も忽然として出現するものである。

それには地域社会を重点とした綿密なる計画と秩序ある開発こそが初期の目的と使命を決定するものであり多摩ニュータウンに果せられた責務も仲々重大である。大東京で一番困っているのは住宅である。その最も困っている住宅を将来四十五万都市としてここ多摩丘陵に展開せしめんとするのであって、地域産業といかに結びつけるか、地域社会をいかに生かしていくかこれ即ち首都圏の命運を決定するものであると言えるであろう

怪獣マモンスは何故死んだ。その徹をふまぬように厳えるものである。（海蔵寺三郎）

多摩風土記

分倍から関戸へ

……新田―北条の古戦場……

元弘三年（一三三三）五月、小手指ケ原で戦火を交えた北条と新田義貞の両軍は、決定的な勝敗を決し得ぬまに、再びこの分倍河原で決戦を行なった。高時の弟、泰時の率いる十万の大軍に対し、新田方の三浦義勝の率いる三万の軍が、分倍河原の戦線を突破して、一気に多摩川を押し渡り、関東八平氏、武蔵七党の精鋭と共に、義貞は一気に鎌倉に突入、にこに北条氏の鎌倉幕府は壊滅した。

分倍河原駅ホームの西端に立って南多摩の丘陵を背に流れる多摩川の河原を望む時、六百余年をさかのぼる当時の戦いの様子が眼前に浮かぶのである。戦いの終った分倍河原に、晩春の陽が傾き、死屍累々、誠に凄惨を極めた戦いだつたという。

分倍河原駅を降り商店街の横のだらだら坂を下って国鉄南武線の踏切を渡ると、府中の高札場から多摩川の関戸橋に通ずる鎌倉街道を西に向かうと間もなく京王線のガードがありそれをすぎてすぐ左側、農家の庭の中に、「分倍河原古戦場」の碑が立っている。拓けゆく武蔵野の中にあって、先に述べた分倍河原の戦いを記念する貴重な史跡である。碑の記載によると―。

「元弘三年五月新田義貞勤王ノ兵ヲ起シ北条氏ヲ攻ムルヤ敵ト分倍河原ニ激戦シテ大ニ之ヲ破リ追撃シテ鎌倉ヲ陥シ遂ニ高時ヲ亡シ建武中興ノ基ヲ成ス由ツテ有志相謀リ碑ヲ其ノ遺跡ニ建テ以ツテ不朽ニ伝フ」

昭和十年という、碑の建設年代を考える時、南朝絶対正統の思想に基づいて記されているとの碑文も自らうなづかれる。北条方を頭どなしに、敵ときめつけているところなど感に興味深い。ここから京王線を左に見ながら鎌倉街道を進むと程なく中河原駅である。

中河原駅を出て左に大きくカーブして築堤に登ると、京王線唯一の大鉄橋である多摩川橋梁に出る。多摩川を隔てて、南多摩の丘陵が連なり見事な眺望である。

鉄橋を渡ると、電車は南多摩郡に入り、最初に着く駅が百草桜ケ丘である。この駅は以前は関戸駅であった。駅前の舗装道路を五百メートルほど東へゆくと、関戸橋を渡ってくる鎌倉街道に出会うがこれを南進して丘陵地帯に入って見よう。大栗川にかかる橋を渡ると、左右の丘陵が迫る道となり、右側に関所跡がある。ここは往時鎌倉の北の玄関で、以前の駅名も関の入口という意味からきたものであった。関所跡の少し先、鎌倉街道を少し南下した多摩町役場の付近は関戸宿があったところである。小田原を本拠とする戦国大名北条氏の勢力が盛んだった永禄七年（一五六四）頃、農民と土地の固い結びつきにより、農産物の生産が向上し、それを商品として流通させるため市が開かれ、関戸宿がつくられた。桜ケ丘南方に今も残る有山部落の有山源左衛門がこの関戸宿を総指揮し、悪質な役人を除き、大いに関戸商人の富を増した事は、地方史として注目にあたいしよう。

また関所跡から東進する道は稲城町を通って川崎に通ずる川崎街道で乞田川を渡ると間もなく連光寺部落に入り、左側には富沢氏の家の立派な門構えが見える。この富沢家の祖先は、戦国時代には、駿河の今川義元の家臣であったがこの地に土着して豪農となったもので、今日に残るその名主構えの建物は貴重な存在である。富沢家から少し先の春月神社のところから川越街道に分れ右側の丘陵に登る道が貝殻記念館へ通ずる道で、丘の上にクリーム色に輝くギリシヤ風建築の記念館を望むことができる。

昭和五年に建てられたこの記念館の中には、明治天皇の遺品、明治維新志士の遺品が納められており、家族連れのハイキングや小学生の遠足等に絶好の地であろう。付近には小野小町碑、隅田川白鬚橋畔から移された、明治の元勲三条実美の別邸、対鶴荘など是非一見に値する史蹟もある。小野小町には、武蔵野の特産物として世に知られた、江戸むらさき染をとるむらさき草をあこがれて小野小町が詠んだという歌が刻まれている

「むさしのの向の丘の草なれば根をたずてもあわむと思ぞふ」

45年度には着工

＜小田急＞多摩新線の建設

多摩ニュータウンと都心とを結ぶ新線の計画はすでに運輸省の認可を得て、四十五年早々着手の予定ですでに設計を完了している。第一期工事区間として、新百合ケ丘―黒川間の四、五六キロを急ぎ建設せんとするものである。

新百合ケ丘駅は、現在線の百合ケ丘と柿生の中間につくられる新駅で、ここから分岐した多摩新線は五カ田、栗平をへてニュータウン入口の黒川にいたり、四十七年度中に完成の予定である。

ここから先は乞田をへてニュータウンの中心である多摩中央までは第二期工事区間となり、早ければ四十八年春ごろには開通の見込みである。

このところには、同社線は代々木上原で地下鉄九号線と連絡、相互乗り入れして霞ケ関方面へと便利になるであろう。

多摩新線の特徴は、運転保安と高速運転にそなえて道路との交叉をすべて立体にし、踏切りがないことである。なお、この新線は駅もそれぞれ特色をもった近代的な設計になっていて、全線複線としニュータウンと都心を結ぶ新線とし、さらに多摩中央より西進し、城山にいたる全線二十七キロ建設の予定である。

農業改良普及所を四カ所に統合

いままで十六カ所あった農業改良普及所が十二月一日から次の四カ所になります。①東京都中央農業改良普及所（江戸川区一之江町四―九―七）。②東京都西多摩農業改良普及所（青梅市大門二八八）。③東京都南多摩農業改良普及所（八王子市子安町一―三〇―四）。④東京都北多摩農業改良普及所（立川市富士見町三―一〇）。

詳細は経済局農業改良課（二二二―五一一一内線二八七三）へ。

造園工事一式
秋輪工業株式会社
取締役社長 秋輪 栄一
調布市上石原一ノ三〇ノ四
電話 〇四二四・八四・三一二一

東海道観光開発株式会社
取締役社長 久保山芳雄
東京都千代田区内幸町2―2富国生命ビル614

東京急行電鉄株式会社
東京都渋谷区大和田町98 TEL 463―1111(代)